

THE YEAR OF THE FLOOD

by Margaret Atwood

Copyright © 2009 by O. W. Toad Ltd.

First published 2009 by McClelland & Stewart, Toronto

This Japanese edition published 2018

by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo

by arrangement with O. W. Toad Ltd. c/o Curtis Brown Group Ltd., London
through The English Agency (Japan) Ltd., Tokyo

目次

へびの知恵の祝祭 1

受粉の日 53

殉教者、聖ダイアン 99

捕食獣の日 141

聖レイチエルと全ての鳥類 173

聖テリーと全ての徒歩の旅人たち 217

聖ジュリアンと全ての靈魂 241

謝辞 255

訳者あとがき——マーガレット・アトウッドが魅せる
スペキュレイティブ・フィクション

259

上巻

〈庭〉

洪水の年

創造の日

アダムと全ての霊長類の祝祭

方舟の祭り

野生食品の聖ユーエル

モグラの日

四月の魚

装画・タケウマ
装丁・後藤葉子

へびの知恵の祝祭

へびの知恵の祝祭

教団暦十八年

本能的な認識の重要性について
アダム一号の話

親愛なるみなさん、仲間の人間たちのみなさん、仲間の創造物たち。

今日はへびの知恵の祝祭日です。私たちの〈子どもたち〉がまた見事な飾り付けをしてくれました。〈カエル〉を食べる〈キツネへび〉の興味深い壁画を描いてくれたアマンドとシャクルトンに感謝しましょう——絡み合った〈命の舞踏〉をしっかりと連想させてくれます。今日の〈祝宴〉には、〈へび〉の形をした野菜、〈ズッキーニ〉を出すのが伝統です。イブ十一号のレベッカのおかげで、独創的なズッキーニとラデイッシュの薄切りデザートが用意されています。本当に、楽しみですね。

しかし最初に、みなさんに警告しておかねばなりません。才能豊かなアダム七号のゼブについて、ある人たちがこそそ探り回っているのです。私たちの〈父なる神の庭園〉には多くの〈種〉が住んでいます。〈生態系〉を作るには多様な種が必要であり、ゼブは非攻撃的な手段を選択しました。もし問われたら、覚えておいてください、「知りません」が常に最良の答えです。

〈へびの知恵〉の出典はマタイによる福音書第十章十六節です。「だから、〈へび〉のように賢く、〈ハト〉のように無害でありなさい」と。私たちの中でも、〈へび〉か〈ハト〉を研究したことがある元生物学者たちは、このことばに当惑させられます。〈へび〉は熟練したハンターで、獲物をマヒさせ、絞め殺し、

押しつぶす能力にすぐれ、そうやって多くの(ハツカネズミ)や(トブネズミ)を捕ってきました。ただし、彼らの生まれながらの技術にもかかわらず、普通は(ヘビ)を「賢い」とは言わないでしょう。それに、(ハト)だって、人間には無害でも、他の(ハト)に対してはひどく攻撃的なのです。オスは機会さえあれば、支配力で劣るオスを虐めたり殺したりします。神の霊は(ハト)になぞらえられることもありませんが、その比喩が単純に私たちに教えてくれるのは、神の霊が必ずしも常に平和的ではないということです。残忍な一面も持ち併せています。

(ヘビ)は、(人間の言葉で表現された神の話)の中でも、重い意味に満ちたシンボルと言えます。その姿は様々です。時には(人類)の邪悪な敵として現れます——たぶん、私たちの(霊長類)の先祖が木の上で眠っていた時には、(コンストリクター)(獲物を締め付けて殺す大ヘビ)は彼らの数少ない夜行性の捕食動物だったでしょう。またこのような先祖たちは——靴なしでしたから——(ヴァイパー)(毒ヘビ)を踏みつけてしまったら、死ぬしかなかったのです。さらに、(ヘビ)は(リバイアサン)(海に棲む巨大な海獣)と同格とみなされています。(人類)を謙虚にするために神が創られた巨大な海獣で、神の(独創性)を示す荘厳な例として、ヨブ記に挙げられています。

古代ギリシャ人の間では、ヘビは癒しの神に捧げられていました。他の宗教でも、しっぽをくわえた(ヘビ)は(人生)のサイクル、つまり(時)の始まりから終わりまでを示すとみなされてきました。(ヘビ)は脱皮するので、(再生)を象徴します——(魂)が古い自分を脱ぎ捨て、そこから輝き現れるのです。実に、複雑なシンボルです。それでは、私たちはどのようにして「(ヘビ)のように賢く」なれるのでしょうか？ 自分のしっぽを食べる？ 人々を悪事に導く？ それとも敵に巻き付いて締め殺す？ もちろん違いますね——なぜなら、同じマタイの一節の中で私たちは、(ハト)のように無害であれ、と命じられているからです。

〈へびの知恵〉とは——思うに——〈へび〉が〈大地〉の震動を感じとるように、すぐに感じる。知恵を指しているのだと。〈へび〉が賢いのは、その即時性においてです。人間が果てもなく築き続ける綿密な知的構想の枠組など、〈へび〉は必要としていません。なぜなら、私たちが抱いているのは信念と信仰であるのに対し、他の〈創造物たち〉が抱いているのは持って生まれた知識だからです。〈人間〉は神の御心を正確に知り尽くすことはできません。〈人間〉の知性など、天使の頭上で跳ね飛ぶピン程度のもので、私たちを包み込んでいる〈聖なる〉大宇宙に比べれば、それくらい小さいのです。

〈人間の言葉で表現された神の話〉によれば、「信仰とは希望の中身、つまり目に見えない物が存在する実証なり」なのです。要点は見えないことです。私たちは理屈や測定によって神を知ることはできません。実のところ、理論付けや測定のやり過ぎは疑念を生むだけなのです。その結果を私たちは知っていますよね、〈彗星〉や原子核による災害は明日にも起こり得るし、言うまでもないですが、〈水なし洪水〉も、すぐ襲ってきそうなのです。この恐怖は私たちの確信を弱めて、〈信仰〉の喪失へと押し流していきます。そこでは悪事を働かせる誘惑が、私たちの〈魂〉に入り込むのです。もし絶滅が待っているのなら、なぜ〈善〉のためにわざわざ努力するのか？

私たち〈人間〉は、信じるために努力せねばなりません、他の〈創造物〉たちは違います。彼らは知っているのです、夜明けがくることを。感じ取ることができるのです——あの薄明かりの波立ちや、水平線のそよぎなどを。全ての〈スズメ〉や、〈ラカク〉だけでなく、〈線虫〉や、〈軟体動物〉や、〈タコ〉、それに〈モ・ヘアヒツジ〉、〈ライオバム〉まで——みんな神の掌たなごころのうちに包みこまれています。私たちが違っていて、彼らには〈信仰〉の必要性がないのです。

さて、〈へび〉の話に戻りますが、どこまでが頭なのか、どこからがしっばなのか、わかりますか？

〈へび〉は体全体で神を体験し、〈地〉を伝わる天地創造の神の震動を感じ取り、考えるより早く反応しま

す。

それこそ、私たちが切望するへびの知恵です。万物の中に神の存在を気づくことです。《恩籠》に恵まれ、《黙想の業》と《徹夜の祈禱》の助けのおかげで、また、神の《植物性薬品》の助けもあって、へびの知恵を体感できる瞬間があることを、喜びをもって感謝しましょう。

さあ、歌いましょう。

神は〈動物たち〉に賜った

神は〈動物たち〉に賜った

私たちには見えない知恵を。

彼らはどう生きるかを生まれながらに知っている、
私たちはこつこつと学ばねばならないのに。

〈神の創造物〉たちは教科書など要らない、
神が彼らの〈心〉と〈魂〉を教育されるから。

陽光は〈ハチ〉にハミングで歌いかけ、
湿った粘土は〈モグラ〉に囁く。

それぞれが神の下さる食物を探し、
おのおのが〈地球〉の甘味を楽しむ。

売る者も買う者もない、
そして、自分本来の巣を汚す者も。

〈ヘビ〉は矢のように賢くて

〈地球〉の震動をしっかりと感じ取る

武装した輝く肉体を走り抜けるのを、
とぐろを巻く背骨に沿って。

ああ、私も、〈へび〉のように、賢ければいいのに――

〈全宇宙〉が神の御力で満ちているのを、

考える〈脳〉でだけでなく、

素早く燃える思いの〈魂〉でも感じ取れるように。

トビー。へびの知恵の祝祭

教団暦二十五年

へびの知恵の祝祭日。老月。トビーは祝祭日と月相をウインクとキスマークのロゴが付いた自分のピンクのノートに書き込む。老月は刈り込みの時、と庭師たちは言った。新しい物を植えて、古い物は切り除ける。自分自身に鋭い刃物を振るって、刈り取るべき余計な部分を切り取るのいい時だ。例えば、自分の頭とかを。

「冗談よ」とトビーは声に出して言う。そんな陰気な考え方はやめるべきね。

今日は爪を切ろう。足の爪も。伸び放題にしてはだめ。マニキュアもできる。ここには化粧品がたくさんある、棚いっぱい。アヌーユー・デリシャス・マニキュア。プラムのようなふつくらお肌のアヌーユー・クリーム。アヌーユー・若さの泉浸礼トータルスキンケア。そのざらつくスキンをはがしましよう！でも、なぜわざわざ磨いたり、膨らませたり、はがしたりするの？でも、やらない理由もない。どちらにしても効果はない。

あなた自身のためにとアヌーユーはいつも謳っていた。ヌー・ユー、新しいあなた。私はまったく新しい自分になれるのよ、とトビーは考える。まったく新しい私もう一人、脱皮したへびさながらに新鮮な。今までで、何人になったのかしら？

トビーは階段を上って屋上まで行くと、双眼鏡を持ち上げて、視野に入る範囲を調べた。雑草の中に動きがある、林の端の方で。ブタたちかしら？ もしそうなら、目立たないようにしている。ハゲワシたちはまだ雄ブタの死体に群がっていた。極小生物体たちも食べ放題だから、きつとも腐りはじめてるはずだ。

何か違うものが見える。建物の近くで、ヒツジの群れが草を食んでる。全部で五匹。三匹はモ・ヘアヒツジで、グリーンに、ピンクに、鮮やかな紫色。あとの二匹は普通のヒツジに見える。モ・ヘアヒツジたちの長い毛はあまりよい状態ではない——もつれて、小枝や枯れ葉がからまつている。テレビや広告では、毛は輝いていた——ヒツジが毛を振り立てると、美しい女が同じたてがみ風の長い髪をはね上げながら叫ぶ。モ・ヘアヒツジで豊かな髪を——でも、美容室のお手入れなしには無理ね。

ヒツジたちは体を寄せ合って、頭をもたげている。トビーにはその理由がわかった。草むらの中に身をかがめながら、二頭のライオバムが狩りをしている。ヒツジたちはその臭いを感じ取りながらも、惑わされているようだ——なにしろ、ライオンと子ヒツジの異種交配なのだ。

紫色のモ・ヘアヒツジは落ち着きがない。獲物つぼく見えてはだめ、とトビーは心の中で語りかける。やっぱり、ライオバムたちが狙ったのは紫のモ・ヘアヒツジだった。群れから切り離して短い距離で追いかける。哀れな獣はその毛が邪魔で走りにくい——脚がついた紫色の恐怖のカツラさながらだ——まもなくライオバムに引き倒されてしまう。厚い毛に覆われた喉を探りあてるのに手間どる間、モ・ヘアヒツジは何度も立ち上がるが、とうとう殺されてしまう。ライオバムたちは落ち着いて食べはじめる。他のヒツジたちはメーメー鳴きながら、どたどたと逃げて行つたが、すぐまた草を食みはじめている。

トビーは今日は庭仕事をして、青野菜を採取するつもりだった。保存食や乾物は、月が欠けるように

減っていく。しかし、ライオバムのせいで、今日はもう仕事をやめることにする。ネコ科はみんな待ち伏せがうまい。一頭が目につく所をうろついて注意を引く間に、仲間がそっと背後に忍び寄ってくるのだ。

午後にはトビーは昼寝する。老月は過去を誘い出す、とピラーが言った。影の中から現れるものは何でも、有り難く受け入れなければならぬ。そして、トビーに過去が戻ってきた。子ども時代の白い木造の家、平凡な木々、後方に広がる林は、霞がかかったように青く輝いている。その中にシカの姿が浮かびあがる。両耳を立て、芝生の飾り物さながら動かない。彼女の父は垣根のそばをシャベルで掘っている。台所の窓に母の姿が時折見える。スープを料理しているのかも。何もかもが平穏で、終わることがないようだった。しかし、この絵のどこにトビーはいるの？ まさに絵なのだ。壁にかかった絵のように平べったい。そこに彼女はいる。

トビーは目を開ける。頬には涙。私が絵の中にいないのは、私が額縁だからだ。これは本当の過去じゃない。私だけが全てをつなぎ合わせているのよ。何本かの消えかけている神経経路に過ぎない。蜃気楼に過ぎないわ。

確か、あの頃の私は楽道家だった。あそこでは。口笛を吹きながら朝を迎えた。世の中に悪いことがあるのは知っていた。人々が話しているのを聞いたし、テレビのニュースでも見た。でも、悪いことは、よそで起こってるようだった。

大学に入る頃には、悪いことが身近に迫ってきた。重苦しい感じを覚えている。まるで、重い硬い足音とドアに響くノックを、ずっと待っているような感じだった。みんなわかっていた。でも、誰もわかっていないと言わなかった。他の連中がそのことについて論じはじめたら、無視した。言ってることは明